

4

突撃！！この人に会いたい

船戸が是非お会いしてお話をお聞きたい。そう思う方を突撃し、インタビューさせて頂くコーナーです。
とにかく熱い人。語りたいもの、伝えたいものを持っている人。そんな人にお会いし、熱い想いを受け取り、
しっかり文章に落とし込む。私にとっての挑戦でもあるコーナーです。
熱い言葉の中から、是非、ヒントになるひと言を見つけて下さい。

生徒が主役の寺子屋学習塾 ～“あずさ塾”飛田梓さんを訪ねて

今回は、京都・梅津で、京町家を利用した「寺子屋みたいな学習塾」を運営されている飛田梓さんを訪ねました。

無料でポストに折り込まれる京都リビング新聞に紹介されていたのを拝見したことがきっかけです。テーマ・教室の風景写真から、是非お話を聞きたいと思い、取材の依頼をさせていただいたところ、飛田さんから早々に快諾のお返事をいただきました。

小学生の下校時間で、外から元気な声が聞こえる中、築70年という京町家で大変充実した時間を過ごすことが出来ました。その様子をご紹介します。



飛田さん。2階の教室にて。

ー寺子屋という塾のスタイルはどこから着想されたのでしょうか。

もともと塾で働いていました。父が副業で学習塾をしていたので、大学のときから教えていたんです。やっていく中で感じていたのが、やっぱり普通の塾の場合、先生中心になってしまうんですね。先生が教えるからこのページやってね、こういう方法でやってね、と。そうなくなってしまって、先生が主役の塾になってしまうところがあって、生徒はじゃあ何をしているかといったら、先生から教えられることを聞いて、これやりなさい、やります、と、指示待ちというスタイルになってしまうのが、本当にその子のためになるのかなあとずっと思っていました。

それもあって、自分が塾をするときには、先生が主役じゃなくて、生徒が主役になって、自分から考えて、自分から動く、先生はそれをサポートするスタイルの塾をしたいと思ったのが、きっかけですね。

ーホームページに、「中学受験をしない小学生対象」という言葉がありました。

中学受験もやってはいるんですが、あまり詰め込み型の勉強がスタイルに合わないというのがあります。教材自体は好きなものではなく、こちらで決めます。生徒それぞれの性格とレベルに合わせて選び、そこは与えたものになるんですけど、プログラムというか計画はこちらが立てるようにしています。1人ひとりです。科目ごと、レベルごとですね。

イメージはジムでしょうか。体を絞るとか、痩せたいとか、来る人によってそれぞれ目的があると思うんですけど、最初はトレーナーの人が目的に合わせたプログラムをある程度組んでくれますよね。あとは、会員の方が自分で練習して、悪いところがあったら直しての繰り返しになると思うんですけど、その勉強版というのでしょうか。それぞれゴールは違うので、そ

れに合わせて私がトレーナーのようにプログラムを組んで、生徒がそれをこなしていくという形です。

―最初からそういうスタイルでいこうと決めて立ち上げたんですか。

いや、今も試行錯誤です。理想型はそうなんですが、子どもなので、大人のようにはいかない部分があります。学校でもずっと6時間、先生から教えられて育ってきているので、そういうスタイルに慣れてしまっています。なので、じゃあ、はい、自分で解説読んでやってみてね、〇付けしてね、とか言っても、いきなりは出来ないんです。それをどういう風にスイッチを変えて、意識させてやっていくかというのは、ものすごく試行錯誤の部分ですね。今も苦労しています。子どもによってもスピードが違いますので。

ここに移ってきてからは3年目です。ここに来る前は西京区の貸会議室のような場所で始めたんですけど、ちょっと手狭になったので、こっちに移ってきました。考え方は、当時から変えていません。

―保護者の方の理解はどうか。これで大丈夫なの、という不安などはないのでしょうか。

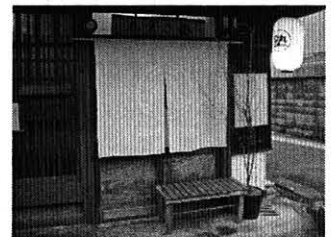
もっと教えてください、ということですね。確かに、一見、自分でやらせているので、放っておいてるという風に見られがちなんですけど、そこは面談のときにすごく説明しますね。そういうスタイルに合わないと思う生徒さんは、別のところに行かれるかもしれません。こういう風にやっているの、賛同してくださっている方が来てくださっているのだと思います。

―何をきっかけに来られる方が多いのですか。

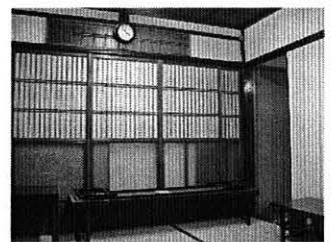
割と多いのは通りがかりですね。ちょうど、ここが通学路になっていますので。ちょっと変わった外観ということもあるので、まずは通りがかり。あとは、生徒さんのご兄弟姉妹、お知り合いですかね。西京区でやっていたので、今もそこから来ている子もいますし、公立中高一貫校の受験コースがあるので、南区や中京区からも通ってきてくれています。学校説明会のときにチラシを配るので、それを見て来てくださりますね。

―築70年の建物で、雰囲気は普通の塾とは違いますね。これは意識的でしょうか。

広く探してはいたんです。普通のテナントみたいなのところも含めて。ここは本当に偶然です。自宅が太秦なんですけど、ここだと車で5分くらいで近いんです。近いところで、かつ学校の前に物件があって、それが京町家で。街中だと京町家って残っているんですけど、この辺りで残っているのはめずらしいんです。なので、すごく目に付いたんです。ぱっと見たときに、自分が思っているイメージと、寺子屋のイメージが、がちっと当てはまりました。なので、偶然ですね。空間の居心地の良さって、すごく大事だと思います。



暖簾がかかっている入り口。



1階のお話を聞いた部屋。



2階の教室。

ー「小1の壁※」は、どんな場面で意識されますか。

※「小1の壁」（リビング記事より）

長時間保育だった保育園時代と違い、放課後の学童保育は時間が短く急な残業などに対応できない。学習習慣の身につけていない年頃と分かっているが、仕事で帰宅時間が遅く子どもの勉強を見てやれない。といった、子どもの小学校入学と同時に働く親が直面する問題のこと。

もともと、そういう問題があるというのは知らなかったんです。保護者の方と面談でお話している中で、弟さんや妹さんが次に小学校に上がるということで、困っているという話がありました。そのときに初めて知ったんです。いろいろ調べてみると、「小1の壁」という名前がついていて、社会問題になっているというのを知りました。きっかけは保護者の方の声ですね。

ー私が感じる小1の壁は、「画一性」ですね。小学生になった途端に、急に型にはまって、管理されている。先生の絵を描くというときに、同じ部分を、同じ角度から描くように指導され、みんな同じような絵を描いていた。心の底からびっくりしましたし、一種の気持ち悪さを感じました。

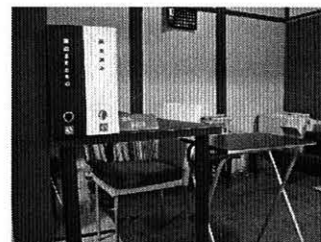
確かにそうですね。勉強でも知識重視になってしまうと、考えなくなってしまいますよね。100マス計算とかをやると、すごく計算スピードは速くなるんですけど、考えずに計算が出来るようになる能力なんです。電卓ですね。タイムが速くなるとか、計算が合うようになるとか、目に見える結果が出るので、保護者の方や他の塾も含め、そっちに寄ってしまう場合があるんです。その能力も大事なんですけど、小さい頃って、そっちの勉強がメインになってしまうと、考える部分が出来なくなってしまいうので、そんな危機感は指導していて感じますね。考える練習というか、センスを磨くための勉強というか、そういうことを小さいうちからやっておかないと思いますね。

ージムもそうですね。体重が落ちるといった目に見える効果が出ているうちはいいんですけど、数字の効果が止まったとき、それでも続けるには別の気持ちの持ち様が必要です。数字で測れないことが大事ということはどう伝えるかというのはありますよね。そのあたり、子どもの感受性は様々で、難しい面もあるのではないのでしょうか。

ひと言で言うとおもしろいですね。1人ひとり全員違います。生徒1人ひとりと、割と学校の話であったり、勉強の話であったり、話す機会が多いんです。話を聞いていると、子どもの発想って大人と違う切り口だったりしますよね。勉強にしても、こんな勉強役に立つの、というところでもないところから質問がきます。それに答えているうちに、自分でも考えがまとまるということはあるですね。ぱっと言ったことが、その子どもの学習や生活習慣にぱっと切り替わる瞬間というのがあって、そういうポイントにかかわれているというのは、自分自身でやりがいを感じる場所ですね。

ー切り替わる瞬間というのは、普段の生活から学ぶステージに切り替わるということでしょうか。

たとえば、塾に入ってきた頃に比べて、質問の仕方が変わる瞬間というのがあるんです。読んで分からないところがあった場合、聞きにくるんですけど、「先生分かりません」と言ってきます。最初はたいがいそうですね。そういう子が、だんだん指導していくと、「先生、ここまでは分かるんです。



飛田先生の机。

ここまでは出来たんです。ここはどうなんですか」という質問に変わるんです。全部分かりませんと丸投げしていた子が、自分で途中までは考えてる。でも、考えてもどうしても分からないところを聞きにきている。たとえばそういう部分ですね。

勉強に関してもそうなんですけど、ルールのようなものを作っています。たとえば、ネガティブな発言をしないと、授業中に言い訳をしないと。そうすることで、何に対しても、しんどい、もう嫌や、と後ろ向きだった子が、ネガティブな発言をしそうになったときに、あっ、と気づいてためるといふか、頑張ろうと言い換えているとか、そういう風に姿勢が変わってくる部分もありますね。

あとは、宿題やってきてね、と言ったときに、こんなにあるの、とか言うんですね。そのときに、私ではなくて他の子が、「誰のための勉強なん。自分のためやろ」とか言ってくれたりね。ああ、ちゃんと浸透してるな、分かるようになってきてるなと思いますし、変わってきてくれているのは嬉しく感じますよね。

ーそれは嬉しいですね。

冗談っぽく言うにしても、そういう空気になっているのが嬉しいですね。そうなるまでには時間がかかったんですけどね。今の形になるまでには、いろいろと変えてきていますので、だんだんと固まってきたといったところですね。

ー地域に根ざすとか、地域の子どもたちを見守るとか、地域の中での位置づけについてはどのようにお考えですか。

個人塾ということもありますが、地域をつないでいく存在としての塾であればいいなと思いますね。もともと京都って、教育熱の高い土地柄だと思うんですけど、地域で子どもたちを見守っていくという風習があると思うんです。夏だったら地蔵盆をして、子どもの成長を祈ったりしますし。そういう部分って、核家族化などでだんだん薄れてきているんですが、脈々と受け継がれている部分もあると思っています。今はまだ出来ていないんですが、塾が子どもの場であり、親の場であり、地域のおじいさん、おばあさんの集う場であるといふか、みんなで子どもの成長を見守りましょうという、そういう空間になるというのは目指すところです。

新しく考えているお預かり事業というのは、まさにそういう空間でありたいという部分でもあります。塾ではあるんですが、放課後の時間、子どもたちが集まってきてお預かりする事業で、地域に根ざして、そこにずっとある存在として根付いていきたいですね。

ー私の地域でも、学童は4年生までで、5年生になった途端なくなります。早く帰ってきて、余計にやることなくだらだらしている。きっとそういう子が多いだろうと思います。その時間に、いつ来てもいいよという場があるといいなとは思いますがね。

普通の公的な学童だと時間が5時くらいに終わって、最大6時までですね。働いてはると、お迎えが間に合わないんです。幼稚園出たばかりの子どもが、1人で家で待っているのも、親としては不安な環境ですね。話を聞いていると、学童というのはお預かりする場ではありませんが、勉強する場ではないので、宿題する時間がないケースもあるようです。小学校低学年って、学習の習慣をつけるのに大事な時期なんですけど、ご両親が働いていると宿題も見てもらえないということもあるようです。そうすると、どうしても遅くなってしまうですね。そんな部分を補うように、放課後を安心して過ごしてもらえる場があればいいなと思っています。

ー勉強の中で、知識を教える面と、考える力を伸ばす部分、そのバランスはどうお考えですか。

たとえば、中学受験で立体図形とか空間図形とかがあるんですが、すごく苦手な子が多いんです。今まではテクニックで解いていたんですね。マニュアルに当てはめて教えるんです。でも、センスのある子は、頭の中でイメージして解けるんです。それが出来る子と、出来ない子というのは、もともと学力のセンスとか器の部分が違うと思われていて、トレーニング出来ない、持って生まれたものと片付けられていました。でも、その部分を徹底的にトレーニングして伸ばそうというプログラムの1つが、パズル道場なんです。

スポーツの世界で力を伸ばすときも、知識分野と感覚分野ってありますよね。知識分野で使うのは戦術なんかがそうですが、頭です。感覚部分は、シュートの練習を繰り返すなどの、体です。スポーツでは、知識と感覚の習得が違う理論で分けられているんですが、勉強の場合、普通は知識ばかりで、感覚は持って生まれたもので、鍛えられないししょうがない、という考えでした。そうではなく、感覚部分を伸ばそう、という発想です。知識の部分と感覚の部分を分けて教えましょう、と。合っているかどうかではなく、どれだけ考えていたかという部分を重視します。やれば鍛えられる部分なんです。

小学校4、5年生で文章題などが出てきて難しくなってきたときに伸びない子というのは、頭の中でイメージする能力が足りてないのだと思うのです。分かりません、と言ったときに、先生が何をするかといえば図を描いて教えたりしますよね。そのセンスがある子は理解も早いですし、少し言っただけでぱっと反応できるというか。その能力を鍛えていないと、マニュアルがないと出来ない子になってしまいます。それはすごく怖いんですよね。

ーサッカーで言うと、そんなところにパス出せる？ っていう感覚なのかもしれませんね。技術があるのは前提として。ところで、塾に通う子どもたちには、勉強に向き合う姿勢が、ある程度ある、という前提なのでしょうか。教える側の難しさは、やる気のスイッチをどうつけるかだと思うんですが、それはある、と。

やる気にさせるというのは難しいですね。ここを目指しているという目標がある子はいいんですが、そうでない子は、目標が見えていないので、ただ楽しもうとしてしまうというのでしょうか。モチベーションを上げるという作業と、学習姿勢をつける部分で、厳しく接していますね。

まずは、学習しているときの空気、自分でやりましょうという空気ですね。そこからはずれる子は、1回言い、2回言ってだめだったら帰らせるんです。それで、厳しい空気を他の子も感じますよね。あとは逆に、それぞれの子のポイントを褒めますね。正解したね、すごいね、ではなくて、質問の仕方よくなったね、とか、ネガティブ発言なくなったね、とか、前ここ出来ていなかったのに出来るようになったね、とか。



ー何かが出来るようになったと自分で感じたときの子どもの表情の変化というのは、ほんとに驚きますよね。いい表情をしています。成長を本人に実感させるというか、その瞬間、違うステージに行くということはあるような気がしますね。

それにちゃんと気づいてあげることが大事ですよね。

ー相当1人ひとりをご覧になっているのでしょうか。

そうですね。それぞれの子で違いますので、教えることが難しいというよりは、その変化に気づいて拾ってあげるほうに意識を向けていますね。

—あいさつもそうなんですよね。あいさつしろ、というよりも、大人があいさつする姿を見ることが大事だと思うんです。そうすると、いつの間にか、あいさつは出来るようになっていく。そうすると、その部分は認めて、じゃあ次に相手の顔を見てしようか、という話をしたりとか。

そうですね。そういう風に持っていく必要がありますよね。学力が伸びる子とそうでない子は、やっぱり学習姿勢が違うんですね。伸びる子の思考、性格、口癖というのがある程度あるんですが、そういった伸びる子のスタイルに導いてあげたいですよね。その上に、その子が苦にならない教材があって、分かる、出来ると感じてもらい、それを褒める。そういう風な流れにしてあげると、ググッとプラスに向いてくると思うんです。そうなれば、どんどん伸びていくかなあ、と。

—子どもに、「何で勉強しないといけないんですか」と聞かれたら、何とお答えになりますか。

授業中に立たのなら、答ええないんです(笑)。それって、真剣に聞いているのはなく、サボりたくて聞いているから。

真剣に本当に聞いてこられたら、うーん、どうでしょう。何と答えるかなあ。。。どういう状況で、どういう気持ちでその子が聞いてきているかによって、答えを変えたいと思います。1つの答えはないんだろうなあ。。。その子の気持ちに合わせて答えるような気がしますね。勉強出来なくて息詰まっている子が聞いているのか、それとも、ただ単にこの時間先生の話を引き張ろうと思って聞いているのか。。。ケースバイケース。難しいですよね。。。。

よく聞かれるのは、これって何の役に立つの、直接使わへんやん、ということ。確かに大人になって使うことはないと思うんですけど、それが出来ることで評価が変わるよ、とは言いますね。たとえば、自分が会社の社長だとして、誰か採用するときに、履歴書を見てどう考えるか。どこの大学を出ているか。そんな現実的な話はしますね、子どもにこんな言い方をしてはいけないのかもしれないけれど。。。勉強というのは、やらなくていいやん、と言うんだけれど、難関大学に入ろうと思うと、ある程度の勉強や努力をしないといけないわけで、それをこなして合格しているということは、粘り強さや達成する力はあるという面で評価されるので、勉強することに損はないということはいえますね。それを証明する手段が勉強であると。あとは部活が一番で、勉強がおざなりになっている子には、野球で成功するのと、勉強でうまくいくのと考えたら、どっちが確率が高いだろう、という話はしますね。すごくリアルなのかもしれないですけど。。。。

—見えている景色が違いますよね。社長と社員で、優先順位が違う。だから答えは1つではない。子どもの勉強もそうかと思っていて、勉強しないならしないでもいい。でもそのつけは自分に返ってくる。それは大人だから知っているけれど、子どもたちにその景色は見えていないですよ。だから言葉で説明するのは難しいと思うんです。たぶん分からないと思うけど言うわ、というもごもごした言い方になる。

あともう1つは、役に立っているか立っていないか、なんて分からないと思っています。九九を勉強していない自分は存在しないので、九九を勉強していない自分と、今の自分を比較することは出来ませんよね。そうすると、勉強したことが役に立ったかどうかを、まがりなりにも義務教育を受けてきた自分が判断出来るはずがない。既に教育を受けてしまっていますから。だから、勉強したことは、自分でも無意識のところで役に立っていると信じるしかない。その物語の上に、勉強というのは成り立つのだと思います。まあ、結局、答えはないのかなと(笑)。

今の子どもって、テレビだったりネットだったりで、キャッチーでまとめやすく、ずっと入ってくることに慣れてるので、分かりにくいことを説明するときも、ごちゃごちゃと言うと聞いてもらえなかったりしますよね。とてももどかしく感じます。

—確かにそうですね。テレビでもテロップまで出て、とにかく分かりやすくしすぎですよね。どんどん考えなくていいように仕向けられてます。

本当にそう思います。子どもたちにそもそも論のようなことを質問されたときに、10なり20なり言いたいことがあっても、この子たちの胸に残るといったら、その中の部分を切り取って、しかも見出しのようにパンと刺激的な部分を出してひと言で答えないと伝わらないのかな、というのがもどかしくもあり、現実でもありますね。逆にそういう話題で20分でも30分でも話が出来るような子どもを育てたいというのはあります。

—そういう分かりやすさとか、測定出来るもの以外は価値がないような風潮は感じますよね。何で勉強するかも、それが分からないから勉強するんだと思います。やった後じゃないと、なぜ勉強が必要だったかが分からない、ということだとは思うんです。まあ、そんな風に答えると、分からないと切り捨てられるのでしょけど(笑)。でも、そこで分かりやすい答えをしてしまうのもよくないと思ってます。何かよう分からんこと言ってるわ、くらいでいいのではないかなあ、と。勉強したらこんないいことがある、という分かりやすさのほうの方が怖いんですよね。

あらたな課題ですね。答えないのが正解ですかね。

—一緒に考えようか、とか(笑)。

コンビニのような塾にはしたくないんですよね。塾って、人対人なので、いくつか塾をするにしても、人がいて、地域に根ざして、コミュニケーションをとって、血の通う塾でありたいなあとと思っています。塾に通って卒塾しますよね。何年か後に帰って来たときに、そのときにいた先生って、大手の塾の場合、ほとんどいないんですよね。やっぱり入れ替わっているし、いろんなコースがあるし、下手したら経営が成り立たずに閉めているかもしれない。そういうのって、寂しいと思うんです。なので、この梅津でやるのであれば、梅津の色の塾で、生徒が塾を愛してくれて、母校のように思ってくれて、何年か後に、先生、って遊びに来たときに、同じ顔で向かい合ってあげられる。どこに作るにしても、そういう空気を作っていきたいなと思っています。

—帰ってきて変わらず先生がいる、というのはとても大事ですね。

親がいて、友だちがいて、というのもあるんですけど、第3の存在として話を聞いてくれる存在だったり、その子が頑張っている姿、成長している姿を、他人ではあるんですけどお付き合い出来て見守っていける、そんな位置づけとして存在したいと思っています。

—何かあったらいつでも帰っておいでよ、ということですね。

あずさ塾さんのHPはこちらです。

<http://www.azusajyuku.com/>

築70年の重みを感じながら、こんな急な階段(→)も上り下りし、あっという間に時間が流れていきました。当日、塾はお休みでしたが、子どもたちが集い、建物がきしみ、びんと空気が張り詰める。そんな様子が脳裏に浮かびました。

飛田さんには、新事業の準備も大変な中、貴重なお時間をいただきました。本当にありがとうございます。

